

10-16 民間から国機関への出向、思考回路の転換を迫られて

1. 立場と仕事

民間企業の社員として7年目のある日、突然、建設省（当時）への転籍出向を命ぜられた。配属先は市街地整備事業を担当する部署で、民間からの出向するのは初めての係長ポスト。そこで、市街地整備事業に関する指導および予算管理を担当した。

2. 遭遇した事態

市街地整備事業についてはごくごく初歩的な知識はあったものの、担当業務は、当該事業への助言指導・補助金・助成金の管理・重要施策の立案等であり、これまでの知識では通用しなかった。それに加えて、狭い執務室のデスクには書類の山という慣れない業務環境に民間からの係長ポストでの出向者は担当課の中で自分ひとりと、戸惑いだらけの船出であった。出向当初から、午前2時、3時は当たり前の膨大な業務量であったことから、配属直後の2、3か月間は肉体的だけでなく精神的にも厳しい状況であった。

知識量の不足に加えて、民間企業の社員から国家公務員へと立場が変わったことにより、一企業の利益から公共の福祉の増進を考えるように思考回路を転換させる必要があり、地域住民にとって何が良いのか、地元自治体は何をしたいのか、等これまでとは異なる視点で関係各位への説明など、試行錯誤しながら業務を遂行した。

3. 対応内容とその結果

全く経験のない分野だったので、まずは業務知識をつけることが最優先だった。時間がない中であつたが、とにかく勉強して業務知識を増やして業務を円滑に進めることを試みた。しかしながら、勉強を行うだけで業務が円滑に進むわけではないうえに、係長ポストの皆が完ぺきな知識を持ち合わせているとも限らないので、皆で情報共有を図ることが重要だと考え、積極的に周囲の同僚係長に声をかけて、業務時間以外でもコミュニケーションを取り、自然に意見交換できる環境を整えた。

入省当初は誰もが業務知識などあるはずもない中で、同僚係長は皆、業務を通して貪欲に知識の蓄積を図るだけでなく知識の深化を図るために積極的に勉強を行うという職場の環境が出来上がっていた。また、異動サイクルが短いという組織課題を克服するため、メンバー相互のコミュニケーションをしっかりとることにより信頼関係が構築され、自然に業務知識の相互共有とキャッチアップを図ることができた。自ら勉強することと同僚とのコミュニケーションにより、民間企業からの出向者としての立場上のジレンマも抱えることなく、業務を円滑に進めるようになった。

建設省（当時）では異動のサイクルが早いので、2年後には頼られるような存在になることができた。